

2015 年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

第1問 青年期，現代社会分野（配点 28）

問1 正解は①。

- ① 1992年に開催された地球サミット（国連環境開発会議）では、「持続可能な開発」を基本理念としたリオ宣言が採択されたほか、気候変動枠組み条約や生物多様性条約が締結された。
- ② 「エスノセントリズムを支持」が誤り。エスノセントリズム（自民族中心主義）とは、自民族の優越性を説いて他民族を抑圧するものであり、こうした姿勢はむしろテロリズムの温床となる。
- ③ 1997年に対人地雷禁止条約が結ばれたというのは正しいが、「アメリカや中国を中心に」というのは誤り。この両国は地雷の戦略的意義を重視することから、同条約に参加していない。
- ④ リプロダクティヴ・ヘルス／ライツとは、「性と生殖に関する健康・権利」と訳されるもので、性と生殖についての男女の平等を主張する理念。雇用機会均等を確立するためのものではない。

問2 正解は②。

- ② レヴィンはドイツ出身の心理学者。青年期を子どもと大人の中間的・過渡的存在としての「マージナル・マン」と呼んだ。
- ① 「退行」はフロイトが提唱した防衛機制の一つ。
- ③ かつてのヨーロッパでは子どもを独自の存在とするのではなく「小さな大人」と位置づけていたという指摘は、フランスの歴史学者フィリップ・アリエスによるもの。
- ④ 「ピーターパン・シンドローム」はアメリカの心理学者ダン・カイリーが命名したもので、これを日本に紹介した精神分析学者・小此木啓吾による「モラトリアム人間」の概念と近い。

問3 正解は③。

- ア 概念や思想の真理性は「有用性」から判断されるべきと説いたのは、プラグマティズムの哲学者ジェームズ。
- イ 精神分析学者ユングについての記述。ユングはもともとフロイトと協力関係にあったが、次第にフロイトから離れ、個人的な経験を超えた集合的無意識があるとして、その中核に「元型」があると説いた。

ウ 青年期の発達課題を重視した精神分析学者エリクソンについての記述。自己理解を深めて真の自己を発見するために行われる試行錯誤が「役割実験」である。

問 4 正解は⑥。

ア ショーペンハウアーではなくヘーゲルについての記述。ショーペンハウアーはカント哲学と古代インド哲学を学ぶなかで、世界を「意志としての世界」と「表象としての世界」とに分ける独自の境地を築いた。その「生への意志」の概念はニーチェに深い影響を与えた。

イ 正文。スペンサーはコントの社会学思想から影響を受け、国家の制約がないときに適者生存と優勝劣敗のメカニズムが働き、社会が発展していくという社会進化論を提唱した。

ウ ヴォルテールは 18 世紀フランスを代表する啓蒙思想家。「旧制度を批判」したという記述は正しいが、「階級闘争」以下の記述はマルクスについてのものである。

問 5 正解は⑧。

a 「節制」が入る。プラトンは知恵・勇気・節制・正義を四元徳として位置づけた。プラトンによれば、人間の魂は三つの部分からなり、そのうち理性の徳が知恵、意志(気概)の徳が勇気、欲望の徳が節制とされ、この三つの調和がとれているときに正義が実現するという。「友愛」はアリストテレスが「正義」とともにポリスの結合原理として挙げているもの。

b 功利主義の哲学者ミルの主著に当たるのが『自由論』。同書でミルは、人間の自由が最大限に尊重されるものだと論じ、自由が制約を受けるのはある行為が他者に危害を与える場合に限られるという他者危害原理を提示した。『正義論』は資料文のこのあとに出てくるロールズの著書名。

c 正義論を説いた 20 世紀の政治哲学者ロールズが現代的に再興したのが社会契約説の考え方。ロールズによれば、当時支配的だった功利主義の考え方は、社会の富を最大化するものではあるにせよ、同時に社会的な不平等を是認するものであった。そこで彼は、自分の立場や境遇について一切無知である(無知のヴェール)と仮定したうえで、そのときに誰もが合意しうる正義の原理がないか検討しようと提案する。これは社会的に望ましい正義の原理についての合意を目指すものであり、その意味で功利主義とは根本から異なる社会契約説的な発想である。

問 6 正解は④。

④ 誤文。「拡大家族が増加」が正しくない。拡大家族とは子どもが結婚後も両親とともに

に住む家族形態のこと。日本では、工業化と都市化が進展した高度経済成長期には拡大家族が大きく減少していき、夫婦と未婚の子のみからなる核家族や単身世帯が増えていった。

- ① 正文。延命治療の技術が進歩した結果、従来であればごく短期間であった「末期」状態が大幅に長くなっている。そうしたなかで、末期患者に対する治療（ターミナル・ケア）を専門に行う施設（ホスピス）の重要性はますます高まっている。
- ② 正文。環境破壊が進むと将来世代の生存条件が厳しくなってしまう。こうしたことを防ぐために提唱されているのが世代間倫理であり、問 1 ①に出てきた「持続可能な開発」の理念もこの考え方に基づくと言える。
- ③ 正文。高齢者や障害者への公的支援が必要なのは当然だが、誰もが通常の暮らしができるノーマライゼーションを実現するためには、公的支援に当たる「公助」と自分で課題を解決する「自助」の二元論ではなく、ボランティアやNPO（非営利組織）なども力を発揮する「共助」が必要だと言われている。

問 7 正解は②。

- A 誤文。二つの図で示されているのは、およそ 1000 人のうち「幸せだと思う者」および「不安や悩みを抱えている者」の割合であるから、そこから特定の子の感じ方の変化を読み取ることはできない。
- B 正文。小学校 5・6 年生と中学生の数値の差の方が、中学生と高校生等の数値の差よりも大きいのは間違いなく、そこから青年期、特に思春期における心の揺らぎがこの結果に関係しているという仮説を立てるのは不合理ではない。
- C 誤文。誤りの点が複数あるが、さしあたり 2004 年の小学校 5・6 年生の図 1 と図 2 の数値についての評価について指摘すると、この調査方法では、幸せだと思う者が 77.3% であって不安や悩みを抱えている者が 55.4% であるからといって、そこからその差に当たる 21.9% の人が「幸せだと思っており、かつ、不安や悩みを抱えていない」と結論することはできない。

問 8 正解は④。

- ④ 必要なのは治療という「具体的対処」であるのに、「書斎」で考えるだけのパヌルーは、「人類救済」のお題目を説いて「顔の見える隣人」を助けようとしないと非難されている。
- ① 病が「身体の物理的な機能不全にすぎない」という機械論的な主張はなされていない。またパヌルーが死に過剰な意味を与えている（宗教的な意味づけ）という批判はなされているが、「勝手な治療を行う」とは述べられていない。
- ② 健康が大事だというのは正しいが、パヌルーが「自己の健康を二の次にしてしまう」

といった批判は見られない。

- ③ 「宗教者」全般への批判はなされていない。ペストの惨禍に神学的な意味を与えてしまふのは「書斎の人」だけであって、「つまらない田舎の司祭」でも生身の人間を知っていれば医師リウーと同様に感じるはずだとされている。

問 9 正解は①。

- ① マキャヴェリは『君主論』において、政治が道德や宗教とは違い、力によって動いていることを冷厳に指摘し、為政者にはときに道德を踏み越える決断力と実行力が求められると説いた。
- ② 主張内容がウェーバーによるものではなく、宗教改革を行ったカルヴァンについてのもとなっている。ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、職業倫理を特徴とするカルヴァンの思想が資本主義発展の基盤になったとした。
- ③ ルネサンス最大の知識人エラスムスは、確かに宗教改革の熱狂を諷め、自由意志の有無についてはルターと論争を行っているが、「教会の現状を維持する」よう説いたわけではない。彼は主著『(痴)愚神礼讃』においてカトリック教会の墮落と腐敗を痛烈に皮肉っている。
- ④ ガリレイは宗教裁判で表向き自説を放棄している。また「天動説に対する教会の弾圧」も誤り。

問 10 正解は③。

- ③ Bの第二の発言は、彼が正義について歴史相対主義的な見方をしていることを表しており、これに対してAの最後の発言は、彼が現実を変えるための「設計図」が必要である、つまり「理想社会を構想すること」が大切だと考えていることを表す。
- ① 後半のBについての説明が誤り。Bは「今を生きる一人ひとり」「生きている人間」の重要性を説いており、「個々人が瞬間を好き勝手に生きること」を是認しているわけではない。
- ② 後半のAについての説明が誤り。Aは人権の尊重や万人の幸せを説いており、「多少の犠牲もやむを得ない」とは論じていない。
- ④ Aは第三の発言で、社会規範が変化＝進歩すると述べている。

第2問 源流思想 (配点 24)

問1 正解は①。

- ① 『論語』ではなく『老子』の言葉であり、「大道廢れて仁義あり」に続く儒家批判の一節となっている。儒家のいう仁義は本来の道が廢れてしまったからこそ説かれている人為的なものにすぎず、こざかしい知恵は人のためのものというより大嘘の道具となっている、といった意味である。
- ② 正しい。言葉巧みに愛想よくする輩に誠実な者はいない、といった意味である。
- ③ 正しい。「故きを温めて新しきを知る、以って師と為るべし」と続く。人にもものを教える者となるためには、古くからの教えを大切にしたいうえで新しい知識を得ることが必要だ、といった意味である。
- ④ 正しい。親子愛こそが道德の根本である、といった意味。孔子の弟子であった有子の言葉として『論語』に出てくる。

問2 正解は③。

- ③ 莊子は、善悪や美醜といった人間的な価値にとらわれない万物斉同の境地を目指すべきだという。そのために自己の心身を忘れる修行法は心齋坐忘と呼ばれる。
- ① 道を人の従うべき道德とし、為政者がその模範となるべきだというのは孔子の徳治主義。
- ② 朱子学の立場。心にある私欲を慎みによって抑え、理を窮めることを目指すのが朱子学の居敬窮理。
- ④ 心の外にある理というのは幻のようなものであって、ひたすら心の内面を磨くことに専念すべきだというのは、王陽明の心即理の立場。

問3 正解は④。

- ④ 「イスラーム」とはアラビア語で「帰依する」の意味で、神への絶対服従が求められる。神の絶対性はキリスト教よりも強調されており、イエスのような「神の子」はありえないとされ、開祖ムハンマドとて神格化はされない。
- ① ムハンマドはあくまで預言者であって、「神の代理人」ではない。キリスト教におけるイエスを念頭に置いた記述。
- ② 「神の像」が誤り。ムスリム（イスラーム教徒）における宗教的な義務＝五行の一つが礼拝であるが、これはムハンマドの生誕地の聖地メッカに向かって祈りを捧げることである。イスラーム教では偶像崇拝が厳しく禁じられている。
- ③ ムハンマドは最後にして最大の預言者とされている。従ってイスラーム教の教義においては、ムハンマド以降に新たな預言者が現れることはありえない。

問 4 14 正解は⑥。

- a 「十戒」が入る。ユダヤ教における律法の核心は、神に約束された地を目指してエジプトから民族を率いる途上のモーセに与えられた十戒である。「山上の垂訓」とはイエスが群衆に向かって説いたとされる教えのことで、『新約聖書』に記述されている。
- b 「アウグスティヌス」が入る。初期キリスト教会において、異端を退けて正統の教義を確立するのに尽力した指導者たちを「教父」と呼ぶが、その最大の人物がアウグスティヌス。「パウロ」も回心してイエスの教えに従った人物だが、イエスの死後間もない彼の時代には「イエス・キリスト」について述べた聖書は存在しない。むしろイエスを「キリスト＝救い主」として位置づけた最大の功労者がパウロである。
- c 「神の恩寵」が入る。アウグスティヌスにとって、救いは神の「理法」として与えられるものではなく、つねに悪へと流れてしまう人間への神による「恩寵」＝恵みとして与えられるとされた。

問 5 15 正解は⑥。

- ア 誤文。『新約聖書』において、イエスは「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」と述べている。イエスにとって律法とはすなわち神の愛であって、律法の正しいあり方を示すことはあっても、それを否定するということはありません。また、キリスト教において罪を贖う者はイエスであり、罪を贖う者が救われるという思想はない。
- イ 正文。ユダヤ教は人々の忠実な信仰とそれに対する神による救済という**契約**の宗教である。聖典『旧約聖書』には世界創造の物語、歴史書、預言書などが含まれている。
- ウ 誤文。イスラーム教では神の前で万人が平等であることが強調されるため、「**聖職者**」は存在しない。それ以外の記述は正しい。

問 6 16 正解は④。

- ④ アリストテレスの師プラトンは、事物の本質（イデア）が個々の物からは独立していると考えたが、アリストテレスは事物の本質（形相、エイダス）は個物に内在していると論じた。
- ① 善が人によって異なるという**相対主義**的な主張は、ソフィストのプロタゴラスなどに見られる考え方。アリストテレスがそうした主張を行ったことはない。
- ② アリストテレスは、事物が形相（エイダス）と**質料**（ヒュレー）からなると主張した。質料だけからなると説いたわけではない。
- ③ アリストテレスが事物の発展に着目したというのは正しいが、「現実態から可能態へ」ではなく「可能態から現実態へ」としなくてはならない。また彼は同一であり続けるものが何もないという主張を行ったわけでもない。

問 7 正解は②。

- ② 書かれた言葉は相手を選ばず、「それを理解する人」だけでなく「まったく不適当な人々」のもとにも届けられることになり、誤解などが生じても正すのが難しい。これに対して語られる言葉は、適切な仕方と適切な相手に行われれば、対話の双方を「助ける力」をもち、言葉が「その命を不滅に保つことができる」とされる。
- ① 語られる言葉は「どのような対話者の魂をも育て」とあるが、資料文では、対話が「ふさわしい相手」に対して適切に行われる場合には種が実を結ぶことになるとされている。
- ③ 書かれた言葉は「誤って扱われ」ることがあるとされているので、「筆者の考えを正しく伝える」わけではない。
- ④ 書かれた言葉が「時とともに説得力を失う」とは言われていないし、「時代の価値観に即した内容」といった趣旨も資料文にはない。

問 8 正解は③。

- ③ ブッダの**四諦**は、苦諦・集諦・滅諦・道諦からなる。このうち**滅諦**とは、煩惱を滅却することで苦しみから逃れた境地に到れるという真理を指し、**道諦**とは、そうした境地に至るための修行法（＝中道，八正道）があるという真理を指す。中道は、快楽と苦行という両極端をいずれも退ける修行法である。
- ①② **苦諦**とは、人生がすべて苦しみであるという真理を指し、**集諦**はそうした苦しみの原因が煩惱の積み重ねによるという真理を指す。
- ④ 「あらゆる存在はいつか必ず滅ぶという真理」は、**四法印**のうち**諸行無常**のことである。また「**禁欲的な苦行**」はバラモン教やジャイナ教では重視されてきたが、仏教においては悟りを妨げるものとして、快楽とともに否定される。

問 9 正解は③。

- ③ リード文で紹介されている老子、荘子、ヘブライズム、プラトン、ブッダは、いずれも言葉の限界を知っていたとされる。しかしヘブライズムではむしろ言葉で汲み尽くせないということに神の偉大さを見出し、プラトンは真理の直観に至る方途として、対話を用いて「言葉の力を活かそうとした」。また老子や荘子は、言葉で道を語り得ないとしつつも、そのことをやはり言葉で語っており、そうしたことから「人間と言葉が不可分である」ことが分かる。
- ① 老荘思想やヘブライズムでは、「言葉で真理そのものを語る」ことは不可能だとはっきり述べられている。
- ② 言葉で語り得るものだけに探究対象を限定するというのは、20 世紀の哲学者ウィト

ゲンシュタインを想起させる記述である。リード文にそうした趣旨の記述はない。

- ④ 真理の悟りや直観は言葉によって到達できるものでないとしつつも、そこに至る道筋としての言葉の役割は否定されておらず、「直接的な体験のなかに真理を求める」ことが重要だという趣旨はリード文に見られない。

第3問 日本思想 (配点 24)

問1 正解は③。

- a 「清き明き心」が入る。清き明き心とは裏表のない正直な心のありさまを指し、古代日本人において理想とされた心情である。
- b 「高く直き心」が入る。高く直き心とは、近世の国学者・賀茂真淵が『万葉集』の研究を通して見いだした古代日本人の心情のことで、儒教や仏教などとは違い、分別にとられない力強い心構えを意味する。

「真心」は賀茂真淵の弟子・本居宣長が古事記から見いだした日本人の心情であり、「事に触れて動く心」とされる。ありのままの素直な心という意味である。

問2 正解は②。

- ② 悟りに違いがあるというのは奈良仏教の一つ法相宗の僧侶・徳一が説いたもので、最澄は徳一を批判し、誰もが悟りに至れるという一乗思想を説いた。
- ① 最澄は「鎮護国家の考え方を否定」していない。鎮護国家思想は奈良仏教に顕著だが、平安仏教（最澄の天台宗および空海の真言宗）もこの傾向を引き継いでいる。
- ③ 最澄は、鑑真が伝えた正式な授戒儀式が小乗式のものであるとして、東大寺などで授けられる具足戒を否定し、自身の延暦寺で「大乘菩薩戒」を授ける戒壇の設立を許可してもらうよう朝廷に願い出ている（大乘戒壇設立運動）。
- ④ 『三教指帰』は最澄のライバル・空海の著作。儒教・道教と仏教を対比して仏教の優位性を説くものである。

問3 正解は⑦。

ア 誤文。念仏を称えることが救いの条件であると説いたのは法然。その弟子が親鸞だが、「自力で悟ろうとする」のは悪人ではなく善人であるとされ、親鸞の悪人正機説は、阿彌陀仏にすがろうとする悪人こそが仏の救いの対象としてふさわしいと考える。

イ 誤文。確かに道元はひたすら坐禅すべき（只管打坐）だと説いたが、それは坐禅が悟りの「手段」であるからではなく、坐禅の修行自体が悟りの実現であるとされる（修証一等）。

ウ 正文。日蓮は天台宗の延暦寺で学び、天台宗の根本経典とされる『法華経』こそが

真の教えだと考えた。そして、これに帰依することを意味する「南無妙法蓮華經」という題目を唱える（唱題）ことを重視した。

問 4 23 正解は①。

- ① 古文辞学派の祖、荻生徂徠は主著『弁道』において、儒学の道は自己の修養だけでなく、天下を安んずるの道であるとし、そのために聖人が制作した「先王の道」を学ばなくてはならないと論じた。
- ② 『聖教要録』は古学の祖、山鹿素行の著作。
- ③ 『翁問答』は日本陽明学の祖と位置づけられる中江藤樹の著作。
- ④ 『論語古義』は古義学の祖、伊藤仁斎の著作。

問 5 24 正解は③。

- ③ 山本常朝は佐賀・鍋島藩の藩士で、『葉隠』を著したことで知られる。同書で彼は、武士の本分は常に死身になって主君のために生きられるかどうかだと説き、為政者としての武士は民衆の精神的指導者であるべきだという士道を説いた山鹿素行を批判した。
- ① 浄瑠璃作家であった近松門左衛門についての記述だが、「義理」と「人情」が逆になっている。義理は公的な規範だが、人情は私的な感情である。近松は両者の板挟みにあう庶民を共感的に描いている。
- ② 浮世草子作家であった井原西鶴についての記述だが、「勤勉や儉約の意義を否定した」が誤り。西鶴は世間を「憂き世」ではなく「浮き世」であるとして、町人の享樂的な生き方を肯定的に描写したが、『日本永代蔵』などで勤勉や儉約の意義を説いている。
- ④ 契沖ではなく本居宣長についての記述。朱子学は客観的な理を重んじ、情を否定するものであるが、宣長は、ものに触れた時に自然に起こる心の動き（もののあはれ）を重んじた。

問 6 25 正解は⑥。

- ア 居敬窮理を説くと同時に江戸時代の身分秩序を理論的に正当化する上下定分の理を説いたのは、江戸儒学の祖と位置づけられる藤原惺窩の弟子である林羅山。
- イ 万人直耕の自然世こそが理想であるとして、農民に寄生する武士たちのあり方を批判したのは、八戸で医師としても活躍した安藤昌益。安藤昌益は神道・儒教・仏教のいずれをも批判している。貝原益軒は、本草学者（植物学・薬物学）として知られた朱子学者。
- ウ 天道と人道によって成り立つ農業の意義を強調し、人の道として勤勞や儉約、分度

と推譲などを説いたのは農政学者の二宮尊徳。石田梅岩は京都で活躍した町人で、「正直と儉約」を旨とする町人徳を説いた石門心学の祖。

問7 26 正解は①。

- ① この資料文で福沢諭吉は、最初の3行で西洋で生まれた懐疑精神の重要性を説いているが、その後で、習慣や感情も異なる文化を軽々しく取り入れるべきではないと釘をさしている。
- ② 資料文では、長年の習慣を「とみにこれを移すべからず」とされている。
- ③ 西洋文明について「軽々これを信ずる」ことは否定されているが、懐疑の精神それ自体をも疑うべきという主張はなされていない。懐疑は西洋における文明の源として評価されている。
- ④ 自国の習慣についても「疑ってはならない」とは言われていない。「疑うべきを疑うことが重要である」。

問8 27 正解は③。

- ③ 民俗学の祖とされる柳田国男は、日本人の精神を探究するにあたって、知識人の執筆した文献によらず、名もない民衆たち（常民）の生活のなかにそれを見出そうとし、常民の習俗や伝承を全国で収集した。
- ① 「主観のみが確かであることを立証する」が誤り。西田幾多郎は西洋的な主客二元論を批判し、主客未分の純粹経験を根本的実在とする。従って主観から独立した客観も、客観のない純粹な主観も反省によってのみもたらされたものにすぎないとされる。
- ② 「名のある芸術家」の創作に意義を見いだしているという点が誤り。民芸運動の創始者である柳宗悦は、名もない職人たちがつくる日用品に真の美を見出した。
- ④ 戦後民主主義の理論的指導者と言える政治学者、丸山真男は、日本政治の決定的な問題を、指導者も人民も政治的決定への責任をとる覚悟のない「無責任の体系」になっている点に求め、近代的な主体性の確立を訴えた。新旧・東西の様々な文化が同居する雑種文化として日本文化を捉えたのは加藤周一。また直観による近代批評の確立者は小林秀雄。

問9 28 正解は④。

- ④ リード文の最終段落にほぼ対応する記述となっている。
- ① ただ「先人の学問を忠実に模倣」するだけでは、時代の課題を解決することができない。
- ② 知識を習得するだけであってはならないという趣旨は見られるが、知的な営みそれ

自体が否定されているわけではない。

- ③ 「人間が直面する困難は次第に軽減されてきた」といった記述は見られない。

第4問 西洋近代思想 (配点 24)

問1 29 正解は②。

- ② 誤文。ルネサンスとはフランス語で「再生・復興」を意味する。そこで再生・復興が目指されたのは「異教的世界」や「神話的世界観」ではない。キリスト教の神学的世界観にとらわれず、ありのままの人間を見つめ、自然のあり方について客観的な把握が目指された。
- ① 正文。ルネサンスはヨーロッパの起源ともいえる古代ギリシア・ローマの芸術を中心とした古典文化を再興させようという運動のこと。これにより、中世における神中心の文化から人間中心の文化への変貌が起こったとされる。
- ③ 正文。レオナルド・ダ・ヴィンチが確立したとされる遠近法は、人間の視点から世界を描写するもので、絵画の技法の面において人間中心の世界観を確立したと言える。また当時は一分野の専門家よりも何事にも秀でた万能人が理想とされ、ダ・ヴィンチやミケランジェロらがその典型とされた。
- ④ 正文。ルネサンス期には、すべては神によって定められているという神学的な世界観から離れた自由な精神が芽生え、人間の自由意志を強調したピコ・デラ・ミランドラはその代表といえる。

問2 30 正解は③。

- ③ ベーコンはイギリス経験論の祖と位置づけられる。主著『ノヴム・オルガヌム (新機関)』において、彼は抽象的な思弁に終始するスコラ哲学を批判し、観察と実験、それに帰納法に基づく新しい学問の方法を提起した。
- ① ニュートンについての記述。『プリンキピア (自然哲学の数学的諸原理)』において、すべての自然現象を万有引力の法則によって説明することで、機械論的自然観を確立した。
- ② 著書名以外は、大陸合理論あるいは近代哲学の祖と言えるデカルトについての記述。
- ④ 著書名以外は、16世紀フランスを代表するモラリストのモンテーニュについての記述。主著は『エッセー (随想録)』で、悲惨な宗教戦争を前にして、自己の正しさを再吟味する懐疑の重要性を強調する立場から「ク・セ・ジュ (私は何を知らるか)」をモットーとし、寛容の精神を訴えた。

問3 31 正解は⑤。

- ア オーウェンについての記述。18世紀から19世紀にかけて活躍したイギリスの社会主義者。マルクス以前の「空想的社会主義者」の一人に数えられる。
- イ フーリエについての記述。「空想的社会主義者」の一人。フランスで活躍した社会主義者で、農業を中心とした協同組合の結合によって理想社会がつくられると説いた。
- ウ バーナード・ショウについての記述。ショウはノーベル文学賞も受賞したイギリスの劇作家で、ウェッブ夫妻らとともに、穏健な社会主義思想を特徴とするフェビアン協会の主要なメンバーである。

問4 32 正解は④。

- ④ 社会学の創始者として知られるコントは、その著書『実証哲学講義』において、人間の知が社会の進歩に対応した三段階で展開されるとして、経験的に確認できる事柄だけによって世界を説明する実証的段階が最高の段階であると説いた。
- ① アメリカのプラグマティスト、デューイについての記述。デューイは「道具主義」を標榜し、単なる死んだ知識ではなく、問題解決能力としての創造的知性に人間の可能性を見出した。
- ② フランスの実存哲学者サルトルについての記述。人間だけが自分の本質を自分で作りあげるとして、これを「人間は実存が本質に先立つ」と表現した。
- ③ ドイツ観念論を大成したヘーゲルについての記述。ヘーゲルは歴史を、主観的精神が絶対精神へと至る精神の自己展開の過程として把握した。

問5 33 正解は②。

- ② ルソーは、個人がバラバラであるだけでは真の自由は実現しないと考え、私的利益を捨象して公共の利益を目指す一般意志へと人々を統合することで、はじめて市民的自由が実現すると考えた。
- ① ハイデッガーの実存哲学についての記述。ハイデッガーによれば、人間にとってもっとも根源的な問題は「存在とは何か」という問いであり、こうした問いがすっかり見失われてしまっている現状を批判した。
- ③ 功利主義の哲学者ミルについての記述。ミルは「最大多数の最大幸福」をスローガンとするベンサム功利主義を継承したが、幸福を単に量的なものとするのではなく、幸福の質的違いを重視し、イエスに見られるような利他的行為こそが真の快樂であると説いた。
- ④ イギリス経験論の哲学者ロックについての記述。一切の知識は経験によってのみ獲得されるという立場から、ロックは、生得観念は何もないと論じた。

問 6 正解は⑤。

- a 『『**純粋理性批判**』』が入る。『**純粋理性批判**』はカントの主著で、理性（理論理性）によって認識できるものの限界を定めることを主題とする。『**人間悟性論**（人間知性論）』はロックの主著。
- b 「**感性**」が入る。カントの認識論によれば、人間の認識は感性と悟性の協働によって成り立つ。まず感性において認識の対象が与えられなければ認識は始まらない。しかしこの対象はまだバラバラの素材に過ぎず、これを悟性がカテゴリーによって整序しなければ、対象を対象として把握することができないとされる。

問 7 正解は⑤。

- ア 正文。構造主義の文化人類学者**レヴィ＝ストロース**によれば、いわゆる未開社会には当地で最も適切な「**野生の思考**」があり、世界を合理的に把握するという点でこれは文明社会における科学的思考と変わらない。
- イ 誤文。人間の言語活動を「**言語ゲーム**」として把握したのは後期の**ウィトゲンシュタイン**。
- ウ 正文。西洋の文明社会では、未開社会は単に非合理的な世界であると考えられがちであったが、**レヴィ＝ストロース**によれば、親族の形成についてのルールなど、未開社会でも極めて複雑なルールが存在するとされ、人々が見えない構造に従っているという点では文明社会とまったく同様であるという。

問 8 正解は②。

- ② 「啓蒙と無縁だったわけではない」という記述は資料文の「様々な神話は、それ自体も啓蒙自身が作り出したものだった」に対応し、「啓蒙の根底には」で始まる後半の文章は、資料文の第 2 段落の記述に対応している。
- ① 資料文では、科学者の世界認識が独裁者による人間支配と同様のものであると述べられている。
- ③ 啓蒙が神話を否定的に捉えるとあるが、資料文には神話自体が啓蒙によって作り出されたとある。
- ④ 後半では科学者と独裁者が「協力」するとあるが、両者の営みが同様であるというのは結果的に言えるだけであって、自覚的な協力関係があるわけではない。

問 9 正解は②。

- ② 近代的理性の意義と限界という定番のテーマである。理性は世界の法則的把握を可能にし、自然と人間を制御する技術をもたらした。しかしそうした理性あるいは科学

がもたらした負の側面も無視することができない状況になっており、そのあり方を再検討すべきだというのがリード文の趣旨である。

- ① 理性が「対話的精神」であるというのは、リード文ではフランクフルト学派の第二世代（ハーバーマスのこと）にのみ当てはまる。また現代の課題を「危機管理を徹底すること」に還元するのは問題を矮小化するものと言える。
- ③ 理性がルネサンス期以降「どの時代においても重要視されてきた」とあるが、ルソーや構造主義をはじめ、理性のはらむ問題に自覚的な思想が出てきたことがリード文でも言及されている。また、「科学なしの世界にいったん戻って」という内容はない。
- ④ 理性と科学技術の意義を全面肯定しており、リード文の趣旨とはまったく合わない。